

(様式)

# 令和4年度 学校評価 学校関係者評価書

学校園名	三木市立志染小学校
------	-----------

## 1 学校教育目標

<p>心豊かに 元気よく 主体的に学ぶ子の育成</p> <p>～ 元気なあいさつ 笑顔いっぱい みんなかがやく 志染っ子 ～</p>
--

## 4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

・児童・保護者・教職員の3視点からの評価及びオープンスクールでのアンケート(7月及び11月)をもとに評価しており、概ね適切に評価されている。

・特に、児童や保護者からの評価は総じて高い評価を得ており、円滑な学校運営を反映しているものと思料される。

・一方で、教職員からの評価は自らを厳しい目線で律している面が伺われるが、十分に役割を果たし、児童と向き合った指導をしてきていると全学校評議員は評価している。

・これら評価をより分かりやすく客観的に訴求すべく、アンケート結果を数値化し、判断できればより良い評価書と考えられるため、今後の改善を求める。

・評価内容を事前に『すぐー』で共有してもらえれば、内容をより理解できた状態で参加できるため、より適切な評価につながる。

・取組内容と取組状況が対応し記載していればより分かりやすい。

## 2 本年度の重点目標

<ul style="list-style-type: none"> <li>・豊かな心と社会性の育成</li> <li>・「確かな学力」の育成</li> <li>・子どもの実態や内面理解に基づく指導の充実</li> <li>・自立した人づくりに繋がる生活習慣の育成</li> </ul>
--

## 3 自己評価結果(達成状況)【 A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない 】

## 5 評価の観点ごとの学校関係者評価

評価の観点	評価項目(取組内容)	取組(達成)の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
学習指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>○確かな学力の向上を図る 学習指導の充実</li> <li>・「学び合い」でつながり 学びを深める授業づくり</li> <li>・主体的に学ぶ子の育成</li> <li>・教育課程特例制度による 「外国語活動」の充実</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホットタイムではAIドリルや現在の学習に必要な補充プリントなど、多様な課題を用意した。個別に指導が必要な児童に対して、授業時間等を使って学力補充を行い、担任や担当で細かに打ち合わせを行いながら個別の課題に応じた指導ができた。</li> <li>・国語科を中心に言葉を大切にすることで、資料や出た意見の言葉を根拠に考える児童が増えた。また、単元の計画を示すことで、学習の見通しをもって授業に参加できるようになった。</li> <li>・ICTを活用し、学び合える環境を整えた。児童は積極的に互いの考えや学習の過程を見合う姿が増えた。一方、自ら積極的に学習に向かい、発言を通して学習を高め合う姿勢については、個人差が大きい。</li> <li>・外国語活動の充実に向けて、授業担当者とALTとの打合せを大切にし、児童がALTの生きた英語をとおして学習できるようにしたことで、英語を使って友だちやALTと関わることを楽しめるようになった。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・AIドリル等のデジタル教材を効果的に活用すると共に、プリント学習やノート学習などアナログ教材の利点を組み合わせ、基礎学力の定着に向けた取組を行う。</li> <li>・今後も授業中の学習の様子や、テスト、家庭学習の結果等を通して児童の学習の実態把握に努め、必要に応じて支援や授業体制の工夫を行う。</li> <li>・児童が主体的に学べる単元づくりに関する研修をさらに深める。</li> <li>・ICTを活用した児童同士の学習の交流方法についてさらに研修を深める。</li> <li>・今後も児童が外国語活動に自信をもって取り組めるよう、ALTと連携した取組をすすめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総じてさらに高い評価でもよいと感じる面はあるが、評価Bは適切であると考える。</li> <li>・「学習計画」がめあての何を示しているか、目標からゴールまで示しているかが分かりづらいので明確化が必要。</li> <li>・学校でのアナログ教育の利点をどう捉えているかについて、すべてをデジタル化するのではなく、書いたり触ったり触れ合ったりすることも大切にしているとの説明を受けた。また、低学年は身体全体を使うことで認知面等における発達にも良い影響を与えると考えており、タブレットだけでは得られないことがあると捉えており、タブレットも積極的に活用しているが、アナログによりコミュニケーション力向上にもつながるとのことでこれからも双方を大切に取組をすすめてほしい。</li> </ul>
道徳教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>○道徳の時間の充実</li> <li>○家庭・地域と連携した 道徳教育の充実</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年度当初に各学年の児童の実態に応じて重点目標や年間指導計画の見直しを行った。年間指導目標に沿ってすべての価値項目について学習できた。</li> <li>・自尊感情を高めていく為に、道徳では「個性の伸長」「友情・信頼」「生命尊重」等の価値項目で、児童一人一人の特徴を理解し、共に尊重し合い、助け合うことについて学んだ。</li> <li>・今年度も、夏季休業と冬季休業の年2回、「兵庫県道徳副読本」を使っての親子読書を行い、家庭と連携しての道徳学習の機会をもった。</li> <li>・1.17の防災訓練の事前・事後指導と関連させて、命の大切さについて全校生で学ぶことができた。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後も、年度当初に各学年の重点目標や年間指導計画の見直しをし、全ての価値項目について学習していく。</li> <li>・授業を通して考えた道徳的価値について、実生活で実践していけるよう、児童自身の生活の場におきかえて考えさせながら、道徳的実践意欲を身につけていく。</li> <li>・今後も継続して、家庭や地域と連携した道徳教育の充実を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総じてもう少し高い評価でもよいと感じる面はあるが、評価Bは適切であると考える。</li> <li>・数値化するとともに、基準をどこに置かれて評価が変わってくるので、慎重に分析して明確な評価につなげてほしい。</li> <li>・どの部分を伸ばせば、「A」評価になるかの記述もあればよい。</li> <li>・人権教育を大切にしながら道徳教育の特質を明確にし、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育ていく取組を進め、この教科での学びを大切にしていきたい。</li> <li>・人生における人としての礎となる教育であるため、従来同様、重要視し取組を継続していきたい。</li> </ul>
人権教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全教育活動における 人権教育の充実</li> <li>○家庭・地域と連携した 人権教育の充実</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校人権作文や標語・ポスターの制作は、児童の人権意識の高揚につながった。</li> <li>・スマイル友だち集会では、人権作文と人権ペープサート劇の発表を通して多様性の理解・尊重と平和・思いやりの大切さについて全校で考えることができた。</li> <li>・「かがやきの木」等の取組を通して、互いの良さを認め合い自分や友だちを大切にすることを育むことができた。ただ、自分に自信が持てない児童がまだまだいることが残念である。</li> <li>・教育事業参観は、4年生が教育事業について学ぶ貴重な機会となった。あわせて保護者の方の大切な思いを聞くことができた。</li> <li>・「親と子が共に学ぶ人権学習」では、コロナ禍で縮小しながらも保護者と事前の話し合いの場をもち、その協力のもと、各学年のねらいにせまる授業を展開することができた。</li> <li>・中学校区の職員研修では、共生社会の実現に向けた研修(オンライン)と、緑が丘東小での人権学習の研究授業・研修会を実施した。これらへの参加により連携を深めることができた。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日頃から身の回りの人権課題を意識させ人権作文やポスターの制作に取り組みさせることでさらに人権意識を高める。</li> <li>・児童による主体的な活動であるスマイル友だち集会を通して人権課題について提案し問題提起する取組を年間通じて継続する。</li> <li>・「かがやきの木」の取組を継続し、友だち・自分のよさに気づき、自分や多様性を認め、互いに尊重することができるようにする。また、通信やHPで児童のがんばりを発信し、地域、家庭とともに児童の自尊感情を高めていく。</li> <li>・交流や教育事業参観などを通じて、教育事業に対する理解を深めると共に、地域の方の思いについて理解を深める。</li> <li>・親と子が共に学ぶ人権学習を中心に、系統的な人権学習を保護者と協働してすすめ、人権に対する意識を高める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総じてもう少し高い評価でもよいと感じる面はあるが、評価Bは適切であると考える。</li> <li>・「自分に自信がない児童がまだまだいる」とあるが、コロナ禍や社会の変容に伴う影響等により自己肯定感をいかに高めるかは、児童のみならず社会全体の問題であると感じるため、引き続き小学校教育の段階から自分に自信を持たせる機会を適切に設ける等の取組強化をお願いしたい。</li> <li>・一人一人の児童がその発達段階に応じて、人権とは何か、その重要性について理解し、自分の大切さとともに他の人の大切さを認め、それが様々な場面や状況下での具体的な態度や行動に生かせるように人権教育を今後もさらに進めていきたい。</li> </ul>

生活指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>○家庭と連携した基礎的・基本的事項の生活化</li> <li>・挨拶運動の推進</li> <li>・場に応じた言葉遣い</li> <li>○いじめや不登校児童を出さない取組</li> <li>・「学校いじめ防止基本方針」</li> <li>・「学校IKOKAマニュアル」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎月の生活目標は、生活指導委員会でその月の児童の様子を見て目標を立て直し、児童の実態に即した目標を設定することができた。</li> <li>・生活チャレンジ週間の期間は、児童も進んで目標に向けて取り組むことができ、またしばらくの間はチャレンジ内容を続けて意識することができた。しかし、チャレンジ週間から時間がたつと意識が薄れてしまうことがあった。</li> <li>・生活アンケートを各学期に実施した。児童間にトラブルがあった場合は、担任同士で連絡を取り合い事情を聴き、該当児童を話し合わせるなどいじめの未然防止に取り組んだ。</li> <li>・毎月の生活指導委員会には、スクールカウンセラーも同席した。児童の課題について共通理解と情報共有し、また急遽取り組むべき問題がある場合は臨時に委員会を開き、早期の問題解決を図った。</li> <li>・欠席が続く児童に対しては状況を情報共有するとともに「学校IKOKAマニュアル」を基本に共通理解し対応した。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活目標と学校行事・児童会活動等と関連付けたり、集会で呼び掛けたりして、生活目標に対する児童の意識を高めていく。</li> <li>・生活チャレンジ週間を設定し、あいさつや場に応じた言葉遣いの指導を継続していく。</li> <li>・日常生活における言葉遣いの重要性を考え、日ごろから場に応じた言葉遣いやあいさつに対する取組に学校全体で力を入れていく。</li> <li>・生活アンケートやアンケートを基にした面談を毎学期継続して実施し、問題の早期発見・早期解決に取り組んでいく。</li> <li>・SCはもちろんのこと、外部機関との連携を今後も引き続き行っていく、欠席が続く児童に対し早期対応を行っていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総じてもう少し高い評価でもよいと感じる面はあるが、評価Bは適切であると考えている。</li> <li>・「場に応じた言葉遣い」についてはアンケート結果などから児童・保護者と教職員の間ではズレが見られるので、両者の評価の違いを分析し今後の取組に活かしてほしい。</li> <li>・各家庭のあり様も変化してきている中、家庭と連携した生活指導が従来以上に重要になってきている。そのため、教職員・スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー・保護者等で一体となって学ぶ場が必要と感じる。また、スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー等による保護者向けの生活指導があればより効果的である。</li> </ul>
特別支援教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>○児童理解に基づく適切な指導と必要な支援の充実</li> <li>○交流及び共同学習の推進</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年度当初に年間の児童理解研修を計画し、昨年より回数を増やし毎学期実施した。研修毎の個別の教育支援計画や指導計画を、児童の変容が分かるような記録の仕方に変更し、研修ごとに共通理解を図った。</li> <li>・配慮を要する児童の支援に関しては、支援内容が多岐にわたっているが、より細やかな支援を行うために担任が個々に対応を工夫して行っている。</li> <li>・若草学級では、全学年と交流の機会をもつことができた。</li> <li>・特別支援学校との交流会では、両校の児童は、ゲームを通して積極的に交流することができた。居住地校交流は定期的に行うことができた。</li> <li>・授業の見通しがもてるように視覚的支援を行うなど授業のユニバーサルデザイン化を進めることができた。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年度の初めに特別支援の研修を全職員で行い、校内支援委員会の機能の充実を図る。</li> <li>・特別支援学級との交流および理解教育の機会を充実させていく。</li> <li>・全教職員で子どもを見守る体制を整え、学校全体を見ながら、児童一人一人に応じた支援や指導を充実させる。また、カリキュラムにおいても工夫して取り組んでいく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総じてもう少し高い評価でもよいと感じる面はあるが、評価Bは適切であると考えている。</li> <li>・一人ひとりの個性を尊重することの重要性を児童にしっかりと理解させ、交流や共同学習を進めることで、道徳教育や人権教育にもつながることが数多くあるため、今後も積極的に取組を進めていただきたい。</li> <li>・個々の児童について発達段階や学校での様子などを把握し、より適切な指導を進めるため研修の場を充実させ、支援や配慮の必要を念頭に置きながら指導を続けていきたい。</li> </ul>
特別活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自主的活動の充実</li> <li>○異年齢集団活動の充実</li> <li>・スマイル班活動</li> <li>・委員会・クラブ活動</li> <li>・学級活動</li> <li>○ねらいに即した振り返りの充実</li> <li>○主体的に活躍できる場の設定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別活動(代表委員会)の体制を変えたことで、児童が主体的に企画運営できる場ができ、児童のアイデアが活動に反映されやすくなった。例えば、運動会では、プログラム作成・スローガン決定など、各委員会が役割を分担し、自主的に活動できた。</li> <li>・委員会・クラブ活動では6年生を中心に下級生と協力しながら活動ができた。</li> <li>・スマイル班活動は、新型コロナウイルス感染症の影響で、集まりにくい状況が続いている。12月のウォークラリーなど、児童主体で全校生で行事をつくる機会がありよかったが、感染予防と異年齢集団活動の充実のバランスが難しかった。</li> <li>・スマイル班活動で6年生が全校生を笑顔にするというねらいに対してできたところやできなかったところを振り返りて明らかにした。実施回数が限られていたが、児童が4月に比べて主体的に企画運営できるようになった。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍で、様々な制約はあるが、直接(対面等)向き合い、触れ合ってこそその効果をしっかりと認識した上で計画・実施できるよう、今後の動向を見極めながら取組を進める。</li> <li>・児童の自治的活動の機会をより多くとる。委員会の常時活動以外の取組が広がりつつあるため、今後も、児童の願いから生まれる活動を、児童の手で進めていけるようにし、児童が自己有用感や達成感を得られるように支援していく。</li> <li>・クラブや学級活動においてもできたことのふりかえりの時間を十分にとって児童が成長を実感し主体性が高まるようにしていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価Aは適正であると考えている。</li> <li>・特別活動の体制を変えたとは具体的には、児童会や代表委員会の体制を変え、児童の自立をより促したとのことで、より活発で幅広い活動が期待される。</li> <li>・クラブ活動の内容は、運動クラブをはじめいくつかの活動があり、それぞれ子どもたちと協議しながら内容を決めているとのことで、今後も児童の自主性を活かした取組を行ってほしい。</li> <li>・ゴルフの町「三木市」でもあるため、三木市で開催されているスナッグゴルフ大会に参加してもよいのではないかと考えるが、今は自然学校でも体験をさせているとのことで、大会については今後の検討が必要と考える。</li> </ul>
家庭・地域との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「地域の中の学校」として信頼される学校づくりの推進</li> <li>・広報活動の充実</li> <li>・「ふるさと学習」の充実</li> <li>・ボランティア(人材)の活用</li> <li>・異校種間連携の充実</li> <li>・新たな連携方法の構築</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感染症対策を講じながら学校行事を行い、可能な限り保護者に学校にお越しいただき児童の活動する様子を見ていただくことができた。</li> <li>・学校通信の地区回覧やHPの更新により情報発信を行ったが、主に環境体験事業に係る取組や老人会との交流、地域総合防災訓練に各区長様にお越しいただいたことを除き、地域の方を招く行事は行えなかった。</li> <li>・2年生の町探検、3・4年生の環境体験や社会科の授業等で地域に出向いたり、地域の方の話を聞かせていただくなどしてふるさと学習に取り組んだ。</li> <li>・「志染っ子かがやかせ隊」(人材バンク)の募集案内をコロナ禍であらためて行うことができた。地域の教育力を十分活用するまでは進められなかったが、図書ボランティアの方々については、読み聞かせや図書室の書架の整理等が計画的にでき、教育活動に大変有効であった。</li> <li>・withコロナを踏まえた、学校・家庭・地域との協働体制づくりに取り組んだが、「志染っ子かがやかせ隊」(人材バンク)を活用した学校サポート体制を構築するまでは行えなかった。</li> <li>・中学進学へのスムーズな接続に向け、緑が丘中学校区の各学校と連携した。児童は、6年生が中学校に出向いての3校交流や5年生の自然学校での緑東小との交流、三木特別支援学校との地域校交流等、交流の機会を持った。教職員は、オンライン等による教職員の合同研修会を実施した。</li> <li>・1年生は、あけぼの認定こども園、志染保育所に出向き交流を行うことができた。また、入学後のスムーズな学校生活が送れるように、新入生についての情報交換を個別に認定こども園等と行った。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感染症対策を講じながら工夫して学校行事や、参観日等の学校公開を行うとともに学校からの便りや、HPの更新による情報発信をより積極的に行い、継続して地域とともにある信頼される学校づくりを推進していく。</li> <li>・「志染っ子かがやかせ隊」(人材バンク)の指導者を中心に、連絡調整の仕方を見直し、各人材バンクの指導者による教育効果を上げるための学校サポート体制を構築する。</li> <li>・就学前の園や中学校区の小・中連携は、年間計画の交流活動を見直し、保幼小中とのスムーズな接続に向け、年度当初より継続して交流が行えるよう取り組む。</li> <li>・「すぐる」による配信で、その活用が適しているか否かを検討しつつ、家庭のみならず、地域の関係協力者等にも登録のすそ野を広げ、積極的な活用を進め、その連携を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総じてもう少し高い評価でもよいと感じる面はあるが、評価Bは適切であると考えている。</li> <li>・図書ボランティアの方々をはじめ多くの地域の方々の協力がある。この恵まれた環境を絶やすことなく、児童が地域からいろいろな学びを続けてもらいたい。</li> <li>・6年生児童は今後も大きな不安と期待を持ちながら緑が丘中学校へ進学することとなるため、4校交流等を実施してきた効果や課題をしっかりと洗い出すとともに、緑が丘中学校進学を終えた児童へのアンケートやヒアリングにより、小学校の時にどのようなことを学び、体験しておけばよりスムーズに進学し環境に馴染めるかを検証し続け、児童を多方面からサポートしていただきたい。</li> </ul>